［実践報告］

健康と癒しの両立を目指して ―徳島大学病院におけるマスキングテープアートの試み（2018年度）―

田中 佳（徳島大学大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）准教授）

抄録

本稿は、2018年度に徳島大学病院で取り組んだマスキングテープアート制作活動の実践報告を行うものである。徳島大学の有志の学生と共に主に二つの作業に取り組んだ。一つは中央診療棟の階段室壁面に装飾を行う階段アートプロジェクトである。壁面の施工や予算や人材等の諸条件、および地域性や患者の年齢層なども勘案して、お遍路さんが四季の風景を巡るというテーマを設定し、制作を行った。もう一つは階段アートを応用した廊下のサインや季節飾りである。これらは患者さんに楽しみや癒しを提供できたばかりでなく、実際に健康改善に結びついたと思われる反響も見られ、職員にも喜ばれた。また院外で行った成果発表の展示では市民向けのマスキングテープアートのワークショップも行ったが、これらの試みや日頃の患者さんや職員とのやり取りを通じて、マスキングテープを用いたアート制作にはコミュニケーション促進に貢献できる可能性があることが新たに分かった。

Key word
ホスピタルアート、マスキングテープ、癒し、健康づくり

1.はじめに

筆者は2018年度の1年間、徳島大学病院の院内のアート展示やコンサート開催、サイン表示の改善などに関わった。同院には性格の異なる複数のギャラリーが設置されており、院内壁面には多くの絵画等が飾られている[1)]。2009年の西病棟の新設に続き、2015年には外来診療棟も新設され、国立大学病院としては綺麗で明るい。1階の待合スペースは天井も高く、気持ちの良い空間である。

本報告で取り上げるマスキングテープアートは、このような既存のコンテンツとは別に立ち上げられた新たな企画である。その内容は大きく二つに分かれる。一つは、中央診療棟階段室の壁面に施した階段アートであり、もう一つはそれを応用した廊下のサインや季節飾りである。以下、これらの取り組みの詳細を紹介し、その意義や可能性について検討を加えたい。

2. 階段アートプロジェクト

制作の経緯と方法

筆者が同院に関わる以前から、院内で階段利用促進が検討事項となっていた。促進策として階段の昇降による消費カロリーを示す案が示されていた。一見、有効に見えたが、これが階段利用のモチベーションの向上に繋がるのかどうか確信を持つことができなかった。とりわけ患者さんにとっては、すでに検査や治療等で数値と付き合っている上にさらに数字を示すことで「数値疲れ」を生むのではないかと思われた。デザイン上も、段側面の至る所に数字を示すことは落ち着きがないように感じられた。

以上の理由から、もっと自然に階段を利用したくなる方法はないか、階段をわざわざ通りたくなるような場所にできないか再検討することになった。その過程で、院内に溢れているアートを階段にも広げられないかという意見があった。しかし階段室の壁面は吹き付け施工となっており、凹凸がある上に釘などは打つことができなかったため、壁面に絵画などを掛けることは現実的ではなかった。また予算上、施工を伴う方法は採ることができず、プロのアーティストに制作を依頼することもできなかった。

一方、階段にアートを導入した事例を調べてみると、大きく二つの傾向が認められた。一つは段面全体に大きな絵を描くというものであった。これは屋内でも屋外でも採用例があり、ひとつながりの階段を縦長の大きなキャンバスに見立てて迫力のある絵を描いているものが多い。屋内向けには、あらかじめ絵を描いたシートを段に合わせて貼るという商品もあり、プロでなくとも取り組むことができる可能性はあった[2)]。しかし、カラフルな段面は遠くから見た場合には目にも楽しいが、実際に昇降する患者さんには足元に不安を与えるのではないかと思われ、果たして病院という空間に適したものか疑問が残った。もう一つの方法は階段の側面の壁面を利用して絵を描くというものである。だが先述の施工と予算と人材の問題から実現は難しかった。

このような条件の下、筆者が注目したのがマスキングテープという素材である。元々は工業用の養生テープとして開発されたが、近年、様々な色柄のテープが発売され、子どもや若い女性を中心に大変な人気を博している[3)]。ラッピングや身の回りのものの装飾に利用され、美術展等のオリジナルグッズとしてもよく目にするようになった。

筆者は2017年11月に、徳島県立美術館のギャラリーを会場として開催された現代美術家と知的障がい者の協働による展示「パラレル/クロッシング　エキシビション2　遊びをせんとや生まれけむ」を見て、マスキングテープの新たな利用法に開眼することになった[4)]。これは第一線で活躍するアーティストが、徳島県内の知的障がい者施設でワークショップを行い、各自は比較的安易な作業を行って、最終的にアーティストがそれらを用いて大きなインスタレーション作品を構成するという試みである。この年の展示では、各自がカラフルな平ゴムを組み合わせたものが繋げられて天井から吊り下げられ、床や壁には、色とりどりのマスキングテープを巻いたり貼ったりした身の回りのおもちゃや道具が置かれたり掛けられたりしていた。平ゴムに触れることで振動が伝わり、人の繋がりが意識される仕組みも魅力的だったが、ここで目が留まったのはマスキングテープの使い方であった。長く切って貼っている箇所もあれば、細かくちぎって模様のように貼っている箇所あり、ぐるぐる巻きにしているものあり、さらにはテープだからといって「貼る」だけでなく、球状に固めているものもあり、長さを生かして「垂らす」という方法を採っているものもある（図1）。「テープ」＝「貼るもの」という前提にとらわれない、自由な発想がそこにあった。同時にマスキングテープという素材が、障がい者を含め幅広い人に扱いやすい素材であることを知ったのである。この経験が階段アートを検討する中で突如思い出された。

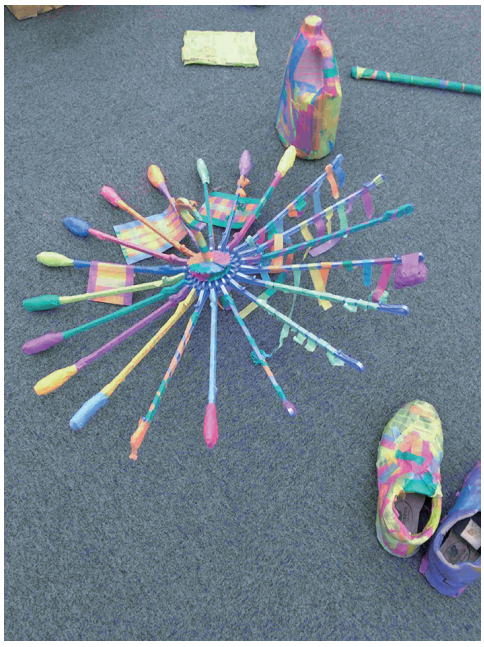

図1　「パラレル／クロッシング　エキシビション2遊びをせんとや生まれけむ」展展示作品より。（徳島県立近代美術館ギャラリー）
以下、写真はすべて筆者撮影。

マスキングテープを壁面装飾に利用している例を調べてみると、住居等の壁面にマスキングテープで簡単な絵を描いている例や、テープの色柄をそのまま利用したデコレーションが見られる。壁面という縛りを外すと、マスキングテープを絵具のように使ってちぎり絵風の精巧な絵を作っている例も多数あり、西洋美術の名画の複製に挑戦しているものもあった。よく観察してみると、モネやゴッホといった印象派特有の色彩分割や点描の技法はマスキングテープでも再現しやすいものであり、筆者の専門である西洋美術史との接続の可能性も見えてきた。

さらに病院等におけるホスピタルアートの導入例も調査した。日本でもアートを取り入れる病院が増えてきているが、その多くは小児病棟や小児外来である。一方、徳島大学病院では患者数の6割以上が高齢者であり、徳島県全体としても高齢の患者が多いという現状がある[5)]。ホスピタルアートを導入するにしても、子ども向けの内容ではそぐわないと考えられた。

こうした予備調査を基に、階段室壁面にマスキングテープを用いて絵を描くことは可能か、どのような主題がふさわしいか、といった問題について学生の意見を求めた。有志で集まった学生の中には制作系の学生は皆無である。学生たちは先に参照した名画の複製に興味を持ち、同様の試みを望んだ。踊り場の壁面であれば可能かと思われたが、昇降を促すという目的に照らすと、何らかの連続性があったほうが望ましかった。このため、原画の所蔵国か都市の地図を表し、旅をしながら絵を見るような設定が良いかということで一旦はまとまった。後に徳島ならではの要素が欲しいという意見も出て、絵を見るお遍路さんなどを挿入してはどうかという案が出た。

実際にデザインを考える段階になり、階段室の壁面の形状は思っていたよりもきれいな長方形の面が少なく、下絵の描画もできないため、西洋絵画の再現は作業上の困難が伴うことが懸念された。解決策を考えていた過程で、連続性を重視するのであればタブロー中心の西洋画よりも、絵巻物や障壁画の伝統がある日本画を参照する方が適していると思うに至った。お遍路さんも日本画風の画面の方が馴染みが良さそうである。次第にお遍路さんを柱として地域性を出すという方向性に転換し、なかなか戸外の風景や季節を感じることが難しい患者さんや職員のことを考えて、四季折々の風景の中をお遍路さんが歩く場面を表し、お遍路さんと一緒に階

段を昇降してもらうというアイディアに集結していった。四季の草花や風物詩は多くの人に好まれる主題でもあり、不快感が少ないと思われた[6]。

以上のような案にまとまったことによって、結果的にお遍路文化を大切にする地域性と高齢者が多い徳島の特性、そして病院という閉じられた場の条件を総合的に活かすコンセプトができあがった。

次はデザイン画の作成である。まず階段の現場で壁面を採寸して、モチーフを施す位置や範囲をメンバー全員で確認した後、階段の模式図をフォーマットとして作成した。そこに季節毎に一人の学生がデザイン案を描画し、提出してもらった案をグループLINEで共有し、皆で検討して修正を重ねていった。その際の留意点は、階段に設置してあるサイン等の視認性を妨げないこと（周囲に十分な余白を空けること）、モチーフが密集した息苦しい画面にしないこと、明らかに不吉な意味が浸透しているモチーフや宗教的行為は挿入しないこと、見やすさと安全性（歩きながらテープが引っかかったりしないように）を考慮して壁面下部を40～50cm程度空けることなどである。またデザイン画作成当初は、四季の草花の表し方や画面構成の参考にするために、琳派を中心とする日本画の画集から作例を参照した[7]。

このような作業を開始したのが2018年の7月末であったため、夏の場面から制作に着手することになった。マスキングテープを使ってモチーフを作るのは誰もが初めての経験であったため、現場の階段での制作を前にして、教室の壁を使って2、3回練習を行った。草花の制作には、一旦『日本の文様』に掲載されている図柄の輪郭を拡大コピーして紙面上でテープの貼り方を研究したり[8]、インターネット上に公開されている単純化されたイラストなどを参考にした。階段の現場でカッターを用いながら作業することは安全上避けたかったこともあり、出来る限りテープの形状をそのまま生かした造形を考案し、モチーフごとのマニュアルを作成した。

現場は検査部門が集まる場所であることから、検査や外来の患者さんがほぼ帰られた夕方からの時間を作業に宛てた。週に1～2日、1回につき3～4時間程度の作業を2～5人程度で行った。作業の際には、作業中であることを示す張り紙を階段入口に施した上で、床面に作業スペースを示す黄色のテープのマーキングを行って歩行者の注意を促した。制作に使用するマスキングテープは小さなクリアボックスに分けて入れ、なるべく壁面に近づけて置くことで通行の邪魔にならないよう配慮した。また鋏に紐をつけ、必ず首から下げて作業するようにし、人に向けたり放置したりしないよう注意を徹底した。カッターを使用する場合には、通行者からは見えない奥まった場所に設置した作業机の上でカッティングシートを用いることとした。壁面に下絵を描くことはできなかったため、マーキング用のテープで大体の大きさの目安を付けた後に、壁面に貼ったデザイン画を見ながら直接テープを貼っていった。制作範囲は原則として立って手が届く範囲までとし、安全面の配慮から脚立の使用は必要最小限に抑えた。

実際の空間でモチーフを制作すると大きさの感覚などが想定と異なる部分もあり、バランスを見てデザインに適宜変更を加えながら整えていった。マスキングテープは張り直しができるため、一旦貼ったものを剥がして別の場所に移動させることもあった。また人が重なって作業しづらい場合には、空いた壁に仮に作っておいて、後に本来の場所に移すこともあった。こうした場合、貼られたテープを爪で剥がそうとすると端が丸まり、形が崩れてしまうことと粘着が弱くなってしまうため、ヘラを用いてできるだけ粘着面に触れないよう一気に剥がすようにした。ただし、これを繰り返すと粘着力が落ちていくばかりでなく手間もかかることから、なるべく一度で位置と形を決めていくことができるよう、工夫が生み出されるようになった。造形自体も後になるほど洗練されていった。（図2）

図2　階段アート作品の例（徳島大学病院中央診療棟階段）

反響

階段アートの作業時間は夕方以降であり、この時間に階段を利用するのはほぼ職員だったが、入院患者さんや家族の通行も毎回見られた。いずれも階段室に足を踏み入れると同時に驚きの声を上げる人が多く、「わーきれい」、「すばらしい」、「よくできているね」、「毎回増えていくのが楽しみ」といった感想を述べ、制作中の学生を励まして下さった。職員もこの空間を楽しんでいるようで、毎回のように声を掛けてくださる方もいた。入院患者さんの中には、「いつもここを通るようにしている」、「誰が作っているんだろうと思っていたが、実際作っているのが見られて嬉しい」といわれる方も複数いた。ある時に歩行器を押した患者さんが、1階で作業準備をしているところを見に来られ、「今は2階の手前を作っているので、早くそこまで上がれるようになるといいですね」という話をしていたら、次の週の作業時に、今度は2階で同じ方に出会った。歩行器は置いてきたという。

ご主人が入院されているという方は、毎日見舞いにいらしており、我々の作業日には必ず見に来て下さった。各モチーフが何であるかを全て正確に把握されていることにも驚いたが、これは絶対良い、もっとアピールすべきだ、入口に案内を、と毎回毎回、熱心に助言や激励を下さった。ご主人もこういうものが好きだからと、写真をたくさん撮られて病室のご主人にいつも見せられていたそうだ。

外来患者さんのご家族から研究室に葉書が届いたこともあった。月1回受診されている車椅子のお母さんに付き添って来られるという方からである。階段アートに気づいたお母さんが、階段室で自ら車椅子を降りて、もっと上を見たいと歩かれたそうだ。次の月には階段アートも進んでおり歩行が伸びた、アートの力はすごい、と綴られていた。制作者の名は階段室の一角に一応記してはいたが、そこから宛先を調べてわざわざ筆を執られるほど感動されたことが伝わり、学生ともども感激し、我々の取り組みの意義を再認識することとなった。

この他、外来や他の用事で病院に足を運ばれた方々から、階段アートを見た、ホッと癒された、学生と一緒に少しずつ作っていくのが良い、といった感想を直接伝えられたり、メールを送って

下さったりする方が少しずつ増えていった。新聞やテレビニュースで報道されるとさらに反響が大きくなり、制作作業中にも「テレビで見たよ」などと声を掛けられることがさらに多くなった。患者さんたちに喜んで頂けるのは何よりも嬉しいが、予想以上に職員の反応も大きかったことから、職員にも緊張感を和らげるものが病院空間の中で求められていることを新たに知った。

3. マスキングテープアートの応用

左側通行サイン

階段アートの作業を始めて1か月ほど経った頃、階段のある中央診療棟1階の廊下の左側通行を促進したいという話が出た。この廊下は院内でも最も通行量の多い場所の一つである。検査のために通行する患者さんばかりでなく、売店やギャラリーを利用する患者さん、職員、業者が常に往来しており、大きなワゴンやストレッチャー、車椅子の通行も多いため、ともするとぶつかる危険もあった。以前より左側通行が決められ、掲示もなされていたが、A4サイズのラミネート加工した貼り紙が壁面数か所にあるだけで、ほとんど気づかれていない様子だった。サインの改善を依頼され、すでに使用していたマスキングテープを上手く応用できないかと考えた。

そこではじめに思いついたのが、階段の手すり側に設置していたお遍路さんシルエットである（図3）。これは職員にも好評であり、階段のお遍路さんが廊下に出る（あるいはその逆）というイメージで連続性がある上、札所では左側通行が決められていることからも整合性があると考えた。

図3　階段内側壁面に設置したお遍路さんシルエット
（同上）

実際に試験的に廊下の壁面に設置してみると、サインとしての機能性や視認性を考えた時に、位置（特に高さ）や矢印の形状と数、テープの色、文字のバランスが案外難しいことが分かった。特に非常口のサインとの混同を避けなければならなかった。何度か実験を重ね、最終的には文字とシルエット、矢印のセットで用いること、床上45cm程度の、目につきやすいが邪魔にはならない位置にすること、色は病院のテーマカラーに近い青色とすることにした（図4）。

図4　お遍路さんシルエットを用いた左側通行サイン
（徳島大学病院中央診療棟1階廊下）

廊下は階段よりもはるかに人の往来が多いこともあり、患者さんから声を掛けられることが非常に多く、サインも概ね好評であった。通行の改善については明確な効果の程は不明だが、設置前よりも秩序が見られるようになったという声も聞かれた。

クリスマスツリー

12月が近づくと、院内二か所に設置することが恒例となっていたクリスマスツリーの話が持ち上がった。毎年、樹木店からリースしたもみの木を12月上旬から25日まで飾っていた。電飾の関係で、設置場所はほぼ固定されていた。ちょうど7月には、同じ場所に七夕飾りを行い、患者さんが書いた短冊を笹の枝にこよりで結びつけられるよう、笹の木の横に短冊とこよりが置かれた机が設置されていた。外来待合室では問題がなかったが、もう一か所は西病棟入口からすぐのところで、自動ドアの開閉の度に風が入り、笹の葉や短冊やこよりが飛び散って散乱することもあった。救急入口でもあり、望ましい状況とは言い難かった。このこととの関連で、クリスマスツリーも従来通りの設置方法で良いのか再検討することになった。

ここでもマスキングテープが応用できそうであった。救急入口には突起物がない方が良いと思われた。テープであれば突起もなく、すでに階段アートのために入手済みでもあったため、費用の面でも節約できる。壁面を用いて壁面にクリスマスツリーを制作する例はインターネット上にも様々な作例が認められた。期間限定であるため、階段アートのように細かく時間をかけて

作っていくのではなく、一度の作業で仕上げるために、テープを長く使ってクロスさせていく方法を採った。結果的に3時間あまりの作業で、高さ2メートルほどのツリーを完成させた。電飾もないため電源との位置関係の配慮も不要であり、西病棟入口から入るとすぐに目に入り、かつギャラリーの展示の邪魔になることのない理想的な場所に設置することができた（図5）。

図5　クリスマスツリー（徳島大学病院西病棟入口）

このツリーは12月26日に撤去することになっていたが、完成後、非常に好評であり、会議で撤去は勿体ないという話になった。そこで、クリスマスを意識して加えたカラフルで光沢のあるテープ類のみ剥がし、緑だけの木に季節ごとの飾りを施していく方針に転換された。26日の作業では早速お正月飾りとして、しめ縄や駒、羽子板、凧、達磨などを加えた（図6）。

図6　リメイクしたクリスマスツリー（同上）

4. 職員ボランティアの参加

院内でマスキングテープを使った装飾への認知が広まった頃、当時の病院長の発案で、職員にもボランティアで制作に参加してもらうことが決まった。通行の際に関心を持って下さった方に声を掛けて制作を体験してもらったり、各部署から希望者を募って参加してもらったりした。業務があるため、30分から1時間程度の短時間の参加が多かったが、何度も継続的に来て下さる方もいた（図7）。初めて参加する職員には作り方を教えることになったが、それが誰にでも分かりやすく説明することを学ぶきっかけとなり、それによってマニュアルを確立させたり、自分たちの作業を客観化することができた。また職員と一緒に作業を進めていきながら、マスキングテープを使った制作は経験がなくとも取り組みやすいこと、様々な人がコミュニケーションを取りながら共同で作業できることといった新たな利点に気づくことになった。

図7　病院職員との共同作業（徳島大学病院中央診療棟階段）

4.「アートが変えるこころとからだ」展

階段アートが「春」の場面まで進み、活動も蓄積されてきた3月に、大学本部にあるギャラリーで成果発表の展示を行うことになった。これまでの活動の経緯等をまとめたポスター展示の他、階段アートを要約した作品、制作中に出た廃材の再利用例などを展示し、会場装飾にもふんだんにマスキングテープを使って、マスキングテープ利用の幅広い可能性を一般の市民向けに示した（図8）。

図8　「アートが変えるこころとからだ」展展示会場（徳島大学ガレリア新蔵ギャラリー）

展示期間中には、マスキングテープアート制作を体験してもらうワークショップを開催した（図9）。会場内に4つのテーブルと各テーブルに4〜5脚の椅子を設け、各テーブルに90×90cmの透明のラッピングフィルムを用意した。テーブル毎に季節を割り振り、各季節のモチーフを2つずつ作ることとした。あらかじめサンプルを貼っておき、学生が作り方を説明し、参加者にはそれを参考にしながらモチーフを作ってもらった。完成作はポスター展示の下に掲示した（図10）。幅広い年齢層の、背景の異なる参加者だったが、誰もが楽しそうに生き生きと作業をし、途中からは別の季節のモチーフも作りたいという声も出て、席替えを行ったほどである。同テーブル内では初対面同士でも自然と会話が弾み、予想以上の盛り上がりを見せた。全作品をパネルに掲示すると、他の人の作品を見て褒め合うなど、ここでも会話が生まれていた。

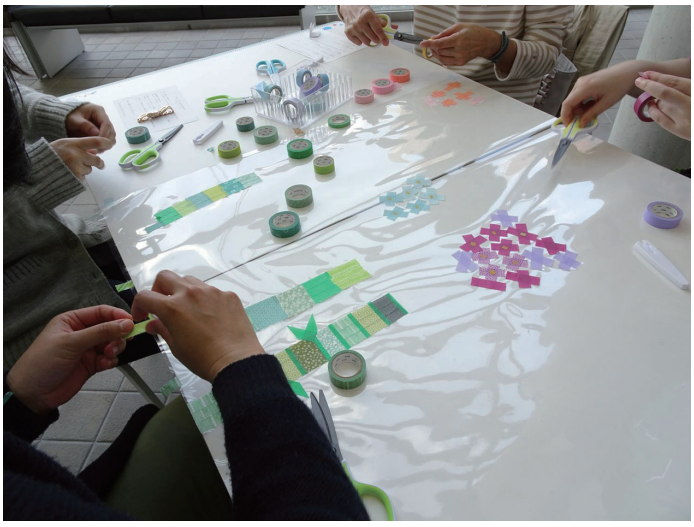

図9　ワークショップの様子（同上）

図10　完成したワークショップ作品（同上）

まとめと今後の可能性

扱いが容易で衛生的で費用負担も少なく、原状回復が可能なため気軽に取り組むことができるマスキングテープアートは、諸条件を踏まえての現実的な選択肢であったが、一定の効果を発揮したといえる。緊張感の高い空間の中で、時間を持て余し、楽しみが少ない患者さんにも喜んでもらうと共に、慌ただしく働く職員にとっても癒しの場を提供することができた。一部の患者さんには歩行の進展という目に見える効果が表れた。階段アートの設置による健康増進効果については、測定方法の開拓も含めて課題は残るものの、本プロジェクトの当初の目的はかなりの程度達成されたといえるだろう。

普段の作業中の会話や職員との共同制作、ワークショップの開催を通じて、マスキングテープアート制作の作業が制作者と鑑賞者、制作者同士、鑑賞者同士のコミュニケーションを促進することも分かった。これは新たな気づきである。仮にプロのアーティストが院内に本格的な作品を制作するという恵まれた条件が整ったとしても、導入は新築や改築時である場合が多いと聞く。我々は素人集団だったことと、いつでもどこにでも導入可能な素材を利用し、継続的な作業となったことで、かえって利点が多かったのかもしれない。

3月に初めて採用したフィルム上（紙上でも同様）へのマスキングテープアート作品の制作は様々な応用が期待できる。無論、病室や共有スペースにマスキングテープを用いた装飾を直接施すことができればそれで良いが、安全な場所であらかじめ作ったものを持ち運んで設置する方が便利な場合もあろう。患者さんや高齢者、あるいは幼児などを巻き込む場合にも安全確保が求められるだろう。この方法であれば、仮に共同制作は難しい場合でも、各々は安全な場所でフィルムに小さな作品を作り、後にそれらを組み合わせて大きな作品に仕上げるといったやり方も考えられる。大作品の一部を自作品が構成することになれば感激も一入なのではないか。個々に制作したら終わってしまうものを作るのでは一時的な楽しみに終始してしまうため、共同制作や大作品へのまとめあげは検討の価値がある。このような工程をうまく組み込むことで、手先を動かすという機能上の効果に加え、コミュニケーションの促進や人々の交流に繋げることができるのではないだろうか。

以上のような利点を今後の活動に活かしていきたいと考えている。2019年度には、徳島市内ですでに新たな舞台での階段アート制作を進めている。また県内の幼稚園や高齢者施設でのマスキングテープアート活動の打診もあり、そうした機会を利用しながら、異分野や世代間の交流を生むことにも繋げていきたい。病院での健康づくりや癒しの創出から一歩進んで、高齢化社会の加速やコミュニティの繋がりの希薄化といった社会問題にも、マスキングテープアートを活かした貢献ができればと考えている。

注

1）関連文献として以下がある。板東孝明・深澤直人・香川征『ホスピタルギャラリー』武蔵野美術大学出版、2016年。

2）株式会社サクラクレパス「階段アート用シール」等。

3）文具用マスキングテープの代表的ブランド「mt」（カモ井加工紙株式会社）は2018年に誕生10周年を迎えた。

4）吉原美恵子（企画・編著）「パラレル/クロッシング　エキシビション2　遊びをせんとや生まれけむ―今村源＋日下部一司＋三嶽伊紗＋アート・メッセンジャー in 徳島　報告書」2018年2月。

5）徳島大学病院「DCPに基づく病院指標（平成29年度病院指標）」
https://www.tokushima-hosp.jp/about/hospital_index_H30.html（2019.9.4閲覧）

6）白石小百合・白石賢・吉岡聖美「ホスピタルアートと病院施設の満足度：飲食コーナーにおけるインテリアに関する調査」『横浜市立大学論叢　社会科学系列』66（3）, 1-22, 2015.

7）古田亮・中村麗子（編）『琳派』（展覧会カタログ）、東京国立近代美術館・東京新聞、2004年他。

8）紅会『日本の文様』（全2巻）、青幻舎、2017年。